

# □ 声 楽

## 小 山 晃

2015年の声楽で真先に挙げたいのは、日本演奏連盟の創立50周年記念で開催された〈演奏家と邦人作曲家シリーズ〉。そのうちの「山田耕作と信時潔」(7月6日)と「歌の日 日本歌曲の歴史を辿って」(7月7日、ともにサントリーホール〈小〉)である。山田と信時では器楽曲も演奏されたが、両作曲家のメインはやはり〈歌曲〉である。そこで松本美和子、光岡暁恵、中鉢聡、大島幾雄、福島明也、三原剛などによって歌われた歌曲たち、歌曲集〈沙羅〉〈この道〉〈箱根八里〉〈六騎〉などは耳に親しいこれらの歌に、新たなスポットをあてたと見える。〈日本歌曲の歴史を辿って〉では瀧廉太郎の〈荒城の月〉から林光〈四つの夕暮れの歌〉まで優れた歌曲作家たち、橋本國彦、平井康三郎、高田三郎、別宮貞雄、中田喜直、團伊玖磨、畑中良輔などの傑作歌曲が歌われた。歌い手も福井敬、岩森美里、松田昌恵、塩田美奈子、永井和子、榎貴志などの名手ぞろいであり、非常に充実した、そして豪華な歌曲の夕べだった。それには日本歌曲表現の先達、伊藤京子のお色の企画・構成もあった。

日本歌曲ではすでに20余年続いているシリーズがある。現在はほぼ隔月で歌われている日本歌曲シリーズ(音楽の友ホール)なのだが、そこでは作曲家、詩人、題材、対照などいたって多面的にスポットがあてられ、日本歌曲の美質、魅力のページが次々に開かれている。15年12月の時点で第3シリーズの第15回になったが、日本歌曲に親しむ一助になっている。

追悼演奏会として歌われたソプラノ瀬山詠子の三善晃歌曲の歌唱が、絶唱といえるすばらしかった。(1月14日、東京文化会館〈小〉)瀬山詠子がかねて三善晃歌曲のスペシャリストではあるのだが、この日歌った歌曲集〈超える影に〉はひときわ思い入れ深く、紡ぎ出される歌は非常に感動的だった。この歌曲集は詩が畑中良輔なのだが、瀬山の故人となった二人への愛情と歌たちへの共感がいぶし銀の結晶になったといえる。忘れられない歌の夕べだった。

日本の声楽家というより、日本出身のドイツの声楽家といえるのがメゾソプラノ白井光子である。彼女とハルトムート・ヘルのピアノはリートデュオとして常にリサイタルでは名演を聞かせてくれる。

ブラームス、R・シュトラウス、リストを歌ったこの日も非の打ちどころない名唱だった。(3月6日、東京文化会館〈小〉)殊にブラームス〈夢は去り〉や〈春の歌〉、リスト〈花とそよ風〉〈3人のジプシー〉は見事だった。

バス岸本力のリサイタルも印象深い歌唱だった。岸本のリサイタルは第29回になったが、彼は若き日の第1回からロシア歌曲、民謡の表現に心を注ぎ、彼が紹介した日本初演したロシア歌曲は相当な数になる。この第29回では、1915年生れ98年没のゲオルギー・スヴィリドフ生誕100年記念として原作曲家の歌曲を18曲ほど聞かせたのだが、エセーニンによる叙詩「ともづなを解かれたロシア」からの8曲は特に力がこもりながらも大層柔軟でもあり、他のスヴィリドフ歌曲と共に、親しみ易いものにしてた。ロシア歌曲にはまだまだ魅力的作品が多いことを明らかにした。

二期会イタリア歌曲研究会が創設されて2015年は30周年にな

った。この研究会を当初からリードしてきたのが、イタリア歌曲のオーソリティ、ソプラノ嶺貞子である。イタリアものを志す若い歌手たちをその間に多数育成し、彼ら彼女らは会員として現在も研鑽に励んでいる。その30周年記念として一夕、イタリアの大詩人による「リーリカの夕べ」が歌われた。(9月17日、東京文化会館〈小〉)イタリアの詩人ではダヌンツィオやペトラルカがよく知られているが、14世紀のアリグエーリや15世紀のポリツィアーノなどは、この日の歌で初めて認識した。アリグエーリの詩作にはドニゼッティが付曲し、その「愛されながら愛に報いぬ者」など新たな発見だった。ここでは8人の詩人による歌曲が歌われたのだが、やはりダヌンツィオ詩に付曲したトスティ、レスベギ、ピッツェッティなどの歌曲に聞きごたえがあり、トスティ「アマランタの4つのカンツォーネ」「かわいい口元」やピッツェッティ「牧人たちは」、ダヌンツィオはやはり大詩人と思わせた。

バス・バリトン佐藤征一郎は日本の名歌手の一人だが、彼は長年にわたってカール・レーヴェの作品を歌い続け、20年あまりをかけて全作品を踏破した。その功績がレーヴェの生国ドイツでも認められ、2014年にはドイツが本拠の国際カール・レーヴェ協会名誉会員に推挙された。その名誉会員は多くなく、ヘルマン・ブライ、フィッシャー＝ディスカウ、テオ・アダム、ペーター・シュライヤーなど世界的な名歌手ばかりである。そこへ佐藤も列座したのだが、その快挙を祝い、佐藤征一郎を軸にした「カール・レーヴェ・ガラ・コンサート」がひらかれた。(9月19日、王子ホール)ここでは日本カール・レーヴェ協会の歌い手たちが、レーヴェのパラードを次々にひもとき堪能させたが、佐藤が歌い語った「オルフ殿」や「エドヴァルド」は情景がまざまざと浮ぶような映像的歌唱で、名手の面目が躍如としていた。

芸術祭参加だったメゾ・ソプラノ内藤明美リサイタルも大変優れたもの。(11月6日、東京オペラシティリサイタルホール)内藤は常々意欲的な歌を聞かせるが、〈シェーンベルクと弟子達〉とした演奏でベルク、ウェーベルン、アイスラーなどの歌曲を歌ったが、後半を占めたシェーンベルク「月に憑かれたピエロ」が名唱といえるものだった。その全21曲を、これも名手のピアノ廻由美子とともに、ピエロの多様な心情をドラマ化していった。この作品の表現は音楽と緊密に結び合いつつ。歌うというより語るシュプレヒゲンザング、日本風ならいわば浄瑠璃である。それを内藤は果敢にはたした。

〈対話する歌〉とタイトルした松平敬バリトン・リサイタルも耳を傾けさせる歌唱だった。(12月14日、東京オペラシティリサイタルホール)松平は現代歌曲の優れた歌い手として知られる一人である。現代の人間だから現代の歌を、と思うのだがなかなかそうはいかない。この日松平はマーラーなども歌ったが、やはりヴァレーズ、リゲティなどに本領があった。それにもまして高橋悠治や湯浅譲二の歌曲を著しい集中力で聞かせた。そして一番は委嘱作の萩原朔太郎詩、西村朗曲「猫町」。そこで松平は高低自在に声を駆使し、歌いつ語りつて初演歌唱を全うさせた。そして「猫町」の幻想性を浮び上らせた。

年末恒例になっている田中淑恵メゾ・ソプラノ・リサイタルも傾聴に値した。(12月20日、東京文化会館〈小〉)前半にヴォルフ、後半でドヴォルザークやオペラ・アリアを歌い、ことにはヴォルフ歌曲が見事だった。〈メーリケ歌曲集〉からの「明け方に」「つきることない愛」「春に」など情感やイメージが即座に立ちのぼる。そのリアル感。それはどの歌もどの1曲も田中自身の詞と音楽になっているからであろう。やはり達人の歌唱だった。